

平成18年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 イトヒキダラ

学名 *Laemonema longipes*

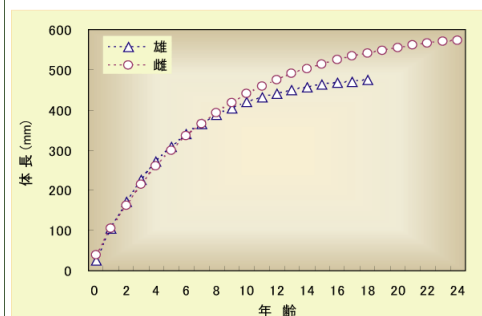
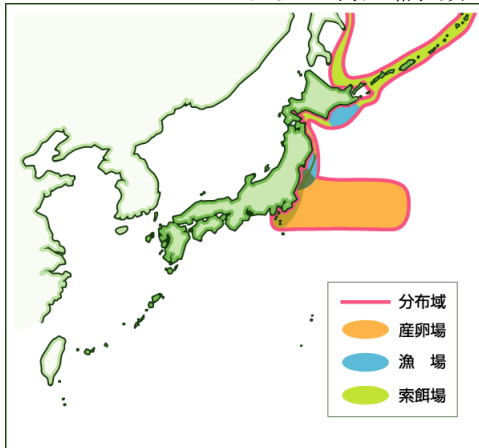
系群名 太平洋系群

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命: 雄18歳、雌24歳程度
成熟開始年齢: 雄5歳、雌7歳程度
産卵期・産卵場: 2～4月、本州関東・東北南部沿岸～本州東方の沖合域
索餌期・索餌場: 周年、本州関東沿岸以北の陸棚斜面域(水深300～1,500m)
食性: オキアミ類や橈脚類などの甲殻類およびハダカイワシ科魚類など
捕食者: ムネダラなどの大型ソコダラ類やオットセイ、マッコウクジラ、ツチクジラなどの海産哺乳類

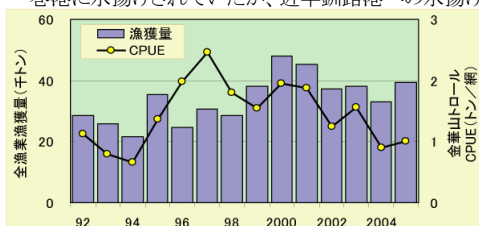


漁業の特徴

本種は1990年代以降に主対象魚として漁獲されるようになり、主に沖合底びき網漁業によって漁獲されている。スケトウダラの代替で練り製品の原料として利用されており、漁獲圧はスケトウダラやその他魚類の漁獲状況によって変化する。また、ロシアに対し日本水域内における漁獲量が割り当てられており、近年はロシア船による漁獲量が増加し、日本船の漁獲量よりも多い。

漁獲の動向

近年の日ロ両国の漁船による漁獲量は1992年が29千トン、1993年が26千トン、1994年が22千トンと徐々に減少した。その後増加し、1995年には35千トンとなり、2000年には48千トンと過去最高を記録した。その後再び減少し、2003年には38千トン、2004年には33千トン、2005年には39千トンとなっている。日本船の漁獲物は従来釧路港と石巻港に水揚げされていたが、近年釧路港への水揚げは減少している。

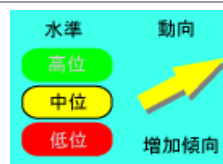
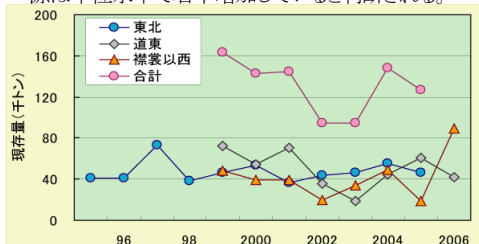


資源評価法

東北および北海道の太平洋側の陸棚斜面域において、主な分布水深帯である水深350～900mで実施した着底トロール調査の結果を基に、面積密度法により現存量を算出した。

資源状態

現存量調査の結果、直近年の現存量は東北海域では過去11年間で4番目に多く、北海道の太平洋側では過去7年間で最も多かった。また、最近5年間のロシア船のCPUEは東北海域では横ばい傾向、北海道では増加傾向にあると考えられる。これらを総合すると資源は中位水準で若干増加していると判断される。



管理方策

資源は複数年に一度発生する卓越年級により支えられている。成長が遅く比較的長寿であるため、一度親魚が減少すると回復が困難であることから、親魚量の維持を管理目標とした。現存量調査では成魚を中心に漁獲されており、その現存量の変動から変化率をもとめ、変化率に過去5年間の平均漁獲量を乗じてABCを算出した。

	2007年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	39千トン	1.0Cave5-yr	-	-
ABCtarget	31千トン	0.8・1.0Cave5-yr	-	-

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は若干増加傾向にある
- 若齢魚の発生には大きな年変化がある
- 成魚の資源状態は安定している

管理方策のまとめ

- 成長が遅く、成熟年齢も比較的高齢であるため、親魚量を維持する必要がある
- 若齢魚を含めた今後の資源動向を注視することが必要

資源評価は毎年更新されます。